

道徳力喚起の道を探る

一、「世の中は段々悪くなる」いまそう思っている人は少なくないでしょう。ただそうした悲観論はいつの時代にもあったようなのです。古代ローマの詩人ホラチウスは「祖父の時代より親の時代はひどく、私たちは親たちよりもっと悪く、つぎの世代はさらに邪悪となるだろう」という言葉を残しています。

元来人間というものが恐ろしい性質をもっていることは、世界各地の神話に物語られています。神々が、子殺し、親殺し、近親相姦、盗み、騙しなどあらゆる悪事を働くのです。神話は少なくとも人類の起源の痕跡ではありましよう。

人類は生き残るためにタブーや掟が必要でした。世界最古の部類に属する有名なバビロニアの法典(紀元前18世紀)には、社会生活に関して諸多の禁止行為が挙げられていて、大工の手落ちで家が倒壊してその家の息子が死んだならば、大工の息子も殺されなければならないなどの「目には目を」の規定もあります。当時このような厳格な規範を整備した国が他の共同体に優越して存続しえたことを窺わせています。

二、紀元前数世紀に古代都市文明が興隆し、仏教、儒教、ギリシャ哲学、ユダヤ教、やがてキリスト教が誕生しました。これら思想は、合理主義を樹立し、さらに人間悪の自覚に立って、自己愛を超える正義、善、慈悲、愛という理念を生み出しました。人間は、自然性を克服して、理性的、類的存在でなければならないことになりました。人類に普遍的な思想が誕生し、世界に応沓に浸透していきます。日本は、草創の頃より仏教と儒教から深い影響を受けてきました。

近代に入り、科学が発展し、人間の自然支配力が飛躍的に拡大し、風向きがかわります。科学の方法は、人間の目的に従ってその範囲で自然から確かな法則をとり出し、対象を操縦するというものです。事物を細分化し、その一面のみを作出する方法といえるでしょう。つまり科学は、本来手段なのです。それが万能となりました。

宗教の力は小さくなり、哲学もまたその多くの領域を諸科学にとって代られてきました。物質生活の知識は増大する反面、より良く生きる全体的知恵は低下し続けてきたようにみえます。グローバル化の社会構造の下、とりわけ物質的達成が巨大化し、それに人間の魂が対応しきれなくなっていると思われまます。日本は犯罪列島の様相を呈するに至りました。

犯罪以外にも、警戒すべき最近の一つの現象を挙げましよう。「僕は妹に恋をする」という少女コミックがベストセラーになっています。ティーンエイジャーの近親相姦が、自然な美しい世界として描かれ、発行部数はすでに600万部に達し、映画化もされました。インセスト・タブーは何千年の人類の知恵です。揺らくことはありえないはずでし

た。でもいまや不気味です。

三、社会の道徳力を喚起することが急がなければならないようです。ただその方策は的を射るものでなくてはなりません。

愛国心の涵養が提唱されています。しかし、祖国愛は、家族愛や郷土愛などの本能的な自己愛の延長線上にあるものだとしても、他との競争、対抗を内包し、社会を相互に闘争させる危険性さえ帯びています。その人倫性はまことに狭小で閉ざされているものです。現代の国際社会で通用するものなのでしょうか。

今日、私たちの前には、世界的なさまざまな課題が横たわっています。最重要なのが環境問題です。先史時代の人間を根本的に変容させたい今の文明においては、人類的レベルの道徳が指導理念になってきていました。現代の科学によって、全人類にとどまらない、それを包みこむあらゆる生物・生命、さらにそれらを生み出し維持している数知れない物質など地球上の全事象が相互に精妙に関連し合っていることが解明されてきています。この新しい広大な領域が、まだ殆どカオスですが、われわれのコスモスとして形成されていくこととなります。人類の責任は限りなく大きくなりました。環境倫理などの新しい思考はまだ途についたばかりです。不可欠なのは環境問題へのとりくみです。その蓄積のうで新しい道標が逐次見えてくると考えます。皆様方の日頃の御活動は本当に有意義であり、心から敬意を表している次第です。

くらしのリサーチセンターも今年創立 19 年を迎え、いわば青春の真直中にあります。一層の御指導をいただきがんばっていきたくないと存じます。

(2007.1.22 社団法人 くらしのリサーチセンター 賀詞交換会あいさつ)